

令和7年度の教育課程特例校の取組内容と自己評価及び学校関係者評価

<p>1 特別な教育課程の概要</p>	<p>特別な教科「道徳」、総合的な学習の時間及び特別活動を統合した新領域「光輝（かがやき）」（以下「光輝」）を中心とした幼小中一貫教育カリキュラムの開発に取り組む。</p> <p>高度で競争的でグローバル化社会に適応するために求められる3つの次元（躍動する感性、レジリエンス、横断的な知識）の中のレジリエンスに注目し、今年度は、人とのかかわりの中でレジリエンスの育成をめざす幼小中一貫教育カリキュラム開発を、子供の挑戦・つまづき・努力を支える「教師のマインドセット」に着目して研究を進めた。</p> <p>また、「光輝」の時間を中心に、異校種・異学年交流や教科指導、生徒指導を一体的に実施し、評価活動を行った。</p>
<p>2 自己評価 (1) 成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・相互参観授業や事後交流会を通して、幼小接続部会の教員が共通して持っているマインドセットを自覚し、それを意識しながら、学級の実態に合った手だてを講じて保育・授業を展開した。各学級3名の抽出児については、中間報告以降も前向きな成長を遂げていた。 ・小中接続部会では、抽出児の「レジリエンス」をルーブリック評価し、「レジリエンス」の成長過程を共通の観点で各教員が評価することで、量的データだけでなく、質的な変容を見取ることができた。 ・中間報告時の課題であった「評価のずれ」については、教師間で抽出児のエピソードを共有し、生成AI等も活用しながら客観性を担保することで解消に務めることができた。
<p>(2) 課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小中接続部会では、今後に向けて、評価方法の客観性の確保と効率化、並びに本実践で得られた知見の一般化に努めていく。 ・抽出児への指導モデルを学級経営全体へ広げ、全ての児童生徒の資質・能力の向上につなげていく。 ・各教科の特徴に応じた種々のアプローチにおいて、授業における発達支持的な生徒指導を充実させるためには、自己を振り返る活動の中で、必要な視点や基準を充実させる必要がある。 ・安心感を土台にした援助・指導の継続・強化、思考活動の充実にも努めていく。
<p>(3) 評価※¹</p>	<p>B</p>
<p>3 学校関係者評価 (1) 意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子供たちの「折れない心」「相手の考えを聞く」「役割を果たす」など子供の「粘り強さ」や「協働性」を高め、定着させたことは、自伸会三信条に通じるものがある。 ・教師の「信じて待つ」、「スモールステップから挑戦させる」、「適切なタイミングでの励まし」等、幼小中での連携も子供たちの成長に、大きな役割を果たしていた。 ・教育目標として「教師の意図と子供の意欲が重なる授業」とあり、

	<p>「失敗や葛藤を成長の機会と捉える」とあるが、先生方の「しなやかなマインドセット」こそが、子供たちの「レジリエンス」を育む「豊かな土壌」であり、共に成長されている様子が伝わってきた。</p> <p>・抽出児への指導モデルを学級経営全体へ広げるとともに、学校全体としての成果と課題を整理し、児童生徒の資質・能力の向上につなげてほしい。</p>
(2) 評価※ ²	B

※¹自己評価 A 高いレベルで達成できた B 達成できた C 一部達成できなかった
D ほとんど達成できなかった

※²学校関係者評価 A とても適切である B 概ね適切である C あまり適切でない D 適切でない
E 判定できない